南アルプス市立櫛形中学校　前期自己評価書

令和５年８月１５日

校長	上　田　　直　人	記入責任者	教頭　吉原　仁実

校訓

高登彼岸

～高い理想の境地をめざし、その目的地に

登りつくよう懸命の努力を惜しむな～

学校教育目標

〇確かな学力　〇豊かな心　〇健やかな体

Ⅰ　評価方法

本校は、令和４年度より小中一貫校としてスタートした。学校評価については来年度以降、小中で回数及び実施時期の足並みを揃えることとし、今年度は今まで通り自己評価及び生徒アンケートを根拠資料に年２回学校評価を行うこととした。来年度は小中で年１回秋に実施するため、今年度は保護者アンケートを後期１回のみ実施することにした。

自己評価の資料として７月、教職員・生徒の２者に対して、アンケート形式によりＷＥＢ上で回答を得た。質問に対しての回答選択肢は４段階になっている。

Ａ：とても、よく～している

Ｂ：だいたい～している

Ｃ：あまり～していない

Ｄ：～していない

Ａ、Ｂは肯定的傾向のプラス評価であり、Ｃ、Ｄは否定的傾向のマイナス評価である。Ａ、Ｂの区別とＣ、Ｄの区別は、回答者の回答時の状況等により変わることもあるため、厳密に区別するのではなく、プラス傾向、マイナス傾向とし、全体の傾向を評価した。

具体的には、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの選択肢を点数化した。Ａ＝４、Ｂ＝３、Ｃ＝２、Ｄ＝１として集計し、回答者数で割って平均点数を求めた。平均点数は次のような意味を持つ。

〇全体にプラス評価（Ａ・Ｂ）が多ければ、平均点は２.５点以上になり４に近づいていく。

〇全体にマイナス評価（Ｃ・Ｄ）が多ければ、平均点は２.５未満になり１に近づいていく。

なお、生徒、保護者のアンケート回答の選択肢として、Ｅ：わからない　という選択肢があるが、これは点数には含めていない。

Ⅱ　全体評価

〇教職員の自己評価、生徒アンケートのそれぞれの集計結果を見ると、いずれも肯定的な評価が高い結果となった。

・教職員自己評価結果では、昨年度２３項目中２１項目において評価の平均が３.０を上回る高い評価であった。今年度前期は２３項目すべてにおいて評価の平均が３.０を上回った。さらに、昨年度より評価ポイントが上回った項目数は１０項目に及び、特に、⑤校務分掌で任された業務に積極的に取り組んでいる項目に関しては、１００％プラス評価であった。このうち、A 回答は７３％であり、学校教育目標の実現に向けて教職員が役割を自覚しつつ、一丸となり教育活動を行っていると考えられる。また、⑭生徒の規範意識や道徳性を育む指導においても、特別活動や特別な教科道徳の授業を要に、教職員が生徒の状況を把握しながら共通理解をしつつ、意識して取り組んでいることが顕著な数値をして表れている。

・生徒アンケートでは、２１の質問項目中、平均点数化できる１９項目のうち１６項目で評価の平均が３.０を上回る結果であった。昨年度と比較しても大きく評価が変動する項目はないが、それゆえ、さらに教員が支援・指導方法を研究し、生徒理解を深め、授業改善に取り組んでいく必要がある。

総括して、櫛形中学校では昨年度から継続した学校教育目標の実現に向け、一人一人の教職員が職務に真摯に向かいあい遂行してきたことで、学校教育活動全般において生徒に適切な指導が行われ、結果、生徒に肯定的に評価されていると自己評価及び生徒アンケートから見て取れる。授業参観や PTA 親子奉仕作業の参加状況からも保護者の協力も大きく、本校の学校評価に係る総合的な評価は、概ね良好な水準にあるといえる。

そのような中でも昨年度と比較したり、一つ一つの結果に目を向けてみたりすると、努力を要する項目がある。教職員、生徒のそれぞれのアンケートについて、次項で考察し課題を明らかにしていきたい。

Ⅲ　アンケートごとの評価

教職員の自己評価アンケートについて

教職員の回答は平均の評価ポイントが２.５を下回るマイナス評価はなかったが、プラス評価の中でも評価の比較的低めな項目は以下の２つであった。

17「あなたは、学校の教育活動について、お便りやホームページを通して保護者や地域に広報していますか」　　昨年度　平均点２.９

今年度　平均点３.０

18「あなたは、教育活動の中に地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っていますか。」　　昨年度　平均点２.７

今年度　平均点３.０

【考察】

17「あなたは、学校の教育活動について、お便りやホームページを通して保護者や地域に広報していますか」の項目では、各分掌でたより等の広報活動は昨年以上に行っていることから昨年度よりポイントが高くなっている。学校が家庭や地域から理解され、協力をいただくには、学校の様子を伝えることが最も大切である。そこで本年度も「学校だより」については、生徒の様子を昨年以上に取り入れた内容で月複数回発行することとしている。学年だより、各種たよりもそれぞれの分掌から定期的に発行されている。

ただ、中には学級だよりの発行回数を増やしたいという担任の声もある。学級だより発行が目的にならないよう、働き方を意識しながら無理なく作成をしていきたい。

ＨＰの活用・広報ついては、「学校のひろば」を充実させていくよう、組織を整え、さらに活用を図っていく。

18「地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っていますか」については、昨年度に引き続き地域人材の活用を行っている。具体的には、いきいき教育人材の活用、職業講話、防災学習会、芸術鑑賞教室などに地域の方を活用している。新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行し、徐々に人材・施設の活用がコロナ禍以前のように戻りつつあるものの、施設訪問は未だに制限がある点から、高評価につながりにくい。各学年の計画に沿って、さらには次年度の計画作成時に、地域の教育力をより多く活用していくことを職員にも周知していきたい。

生徒の評価アンケートについて

生徒の回答は平均の評価ポイントが２.５を下回るマイナス評価はなかったが、プラス評価の中でも評価の比較的低い項目は以下の３つであった。

11「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている」　昨年度　平均点２.６
今年度　平均点２.６

12「わたしは、家庭学習（宿題や自主学習、塾・家庭教師との勉強）をしている」
昨年度　平均点２.９
今年度　平均点２.９

13「わたしは、読書をしている」　昨年度　平均点２.７
今年度　平均点２.７

【考察・改善策】

11「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている」の項目については、「いつも伝えている」「伝えている」と回答した生徒は、昨年度とほぼ同じ５４．８％と約半数、「伝えていない」というマイナス回答は昨年度の１２％から７．８％に減少した。教員が授業中に生徒の発言をする機会を設ける授業づくりをさらにしていくことが必要である。その一方、小中一貫校の取組として行っているスリンプルプログラムの成果が、「伝えていない」という回答の減少につながっていると考えられる。今後もスリンプルプログラムを取り入れた「くっしータイム」を継続し、全校体制で計画的に実施していくことが大切である。

12「わたしは、家庭学習（宿題や自主学習、塾・家庭教師との勉強）をしている」の項目については、「あまりしていない」「していない」という生徒の回答が昨年度とほぼ同じ状況の３０％近くであったことが、大きな課題である。全国学力把握調査においても、家庭学習への取り組みに課題がある。学校は、定期テスト前には、１週間の「テスト前学習集中期間」を設定し、さらに、学年生徒会を中心に学年ごとに家庭学習の取り組みを行っているが、継続的に家庭学習に取り組めていない生徒が一定数いることが見て取れる。今後、各教科のシラバスを有効利用しながら、学習において自己調整力を育てていくために、校内研や諸会議の中で検討をしていく。

13「わたしは、読書をしている」の項目については、「よく読んでいる」「読んでいる」と回答した生徒が５８.４％であり、昨年度とほぼ変わりない。教職員が読書の指導をしていると８８％が肯定的に回答した数値と、生徒が取り組んでいると回答した数値に開きがあることも昨年と同じであるが、火～金の１０分間の朝読書の時間を今後もしっかり時間を確保していくことが大切であり、委員会活動や秋の読書週間など、効果的な読書推進活動を検討していく。